



私たちが伝えたい

全私保連保育運動 新しい時代は 子どもから 子どもの今が未来を創る

全私保連保育運動推進会議
編



7 つ の メ ッ セ ー ジ 集



新しい時代は子どもから

～子どもの今が未来を創る～

子どもの「遊び」を
守りましょう

子どもの思いを
受け止めましょう

子どもの
「自分でやりたい」を
大切にしましょう

子ども自身に
乗り越える力を
育てましょう

みんなで食べると
美味しいんです

子どもは自然が
大好きです

子ども同士の
関わりが大切です

公社)全国私立保育連盟は、未来を生きていく子どもたちの為に
社会へ向けて、7つのメッセージを送ります。



あおむし通信

<https://www.zenshihoren.or.jp/>



新しい時代は子どもから

<https://undou.zenshihoren.or.jp/>



全私保連

公式 YouTube チャンネル

<https://www.youtube.com/channel/UCy3LvUSg5wmwIXdAORkkJXA>



公益社団法人

全国私立保育連盟

「すべての子どもを、すべての大人で支えていく社会」の実現を目指し続けます

これまで公益社団法人全国私立保育連盟は、全国の会員園とともに、第1次子どもと家庭にやさしい環境づくり運動（1992～1994年）、第2次子どもと家庭にやさしい環境づくり運動（1995～1997年）、21世紀を担う子育て環境づくり運動（2001～2003年）を展開し、続いて、日本の今の子どもたちと家庭・地域の子育てを支えようと、「子育て再生—子ども自身の生きる力の再生・家庭の子育て力の再生・子どもと家庭を支える地域の再生」をスローガンに、2005年4月～2011年3月まで「子育てルネッサンス運動Ⅰ・Ⅱ」に取り組んできました。そして、2011年4月～2021年3月の「子どもの育ちを支える運動」では、「すべての子どもを、すべての大人で支えていく社会」の実現を目指してきました。

2021年4月からは「新しい時代は子どもから—子どもの今が未来を創る—」をテーマに、会員園とともに社会全体へ向けて新たな保育運動を展開しています。

日本は今、従来の予測を超える勢いで進む少

子社会への進行を止めるために、こども家庭庁を創設し（2023年4月）、一元管理の下、「こども政策」を進めています。2023年12月には「幼児期までのこどもの育ちに係る基本的なビジョン（はじめの100か月の育ちビジョン）」を閣議決定し、具体的な行動目標として「5つのビジョン」にまとめ、「こどもまんなか社会」の推進を目指しています。

全私保連の新しい保育運動では、私たちが子どもをまんなかにした社会をつくっていくために、いつも大切にして、知ってほしいことを「私たちが伝えたい7つのメッセージ」として表しました。そして、保育運動のロゴマークとともにポスターやチラシを作成し、会員園に伝えてきました。

2023年6月には、3年ぶりの開催となった第65回全国私立保育研究大会・徳島大会で、ケロポンズさんに作成をお願いしたテーマソング「ちきゅうのこども」を公開しました。このテーマソングは、保育運動の趣旨に合うように保育運動推進会議のメンバーとケロポンズさんが曲や歌詞について何度も打ち合わせを行い完

成したもので、子どもたちも楽しんでもらえるよう簡単な振り付けも公開しています。また、HPあおむし通信では、地域組織の取り組みや個々の保育施設の活動の様子をご覧いただくこともできます。

2024年6月には、こども家庭庁の「こどもまんなか宣言」の趣旨に賛同し、「こどもまんなか応援サポーター」宣言をしました。この保育運動を進めていくことが「こどもまんなか社会」の構築に寄与するものと考えています。

この冊子は、これまで「保育通信」に掲載されたものを再構成し、全私保連活動にご理解をいただいている先生方に「7つのメッセージ」への思いを新たにご寄稿いただきました。会員園から保護者のみなさまへ、そして社会への大きなメッセージとなることを期待しています。

2025年3月

公益社団法人全国私立保育連盟会長 川下勝利



私たちが伝えたい7つのメッセージ

1

子どもの思いを受け止めましょう

登園時の子どもの思いはさまざまです。「〇〇ちゃんと遊びの続きしよう」「YouTubeでダンスの練習してきた」「カブトムシかえ孵ったかな」のような前向きなものもあれば、「夜遅くに寝た」「朝ごはん食べてない」「おうちで叱られた」「パパとママはケンカばかり」といった心配なものも……。降園時も同じです。おうちの人の顔を見るなり、「今日、先生にほめてもらった」「縄跳びできるようになったよ」の「やったー報告」から、「〇〇ちゃんが遊んでくれない」といった「もやもや報告」まで……。顔を見て、身体に触れ、あるいは抱っこして、子どもの話を聞きたいですね。

喋れない赤ちゃんならどのように伝えるでしょう。表情や泣き声は大きな手がかりです。

毎日の関わりの中で、いつもの様子を熟知する大人が連携すること、それが子どもの思いを受け止めることにつながります。

「子どもの思いを受け止める」とはどういうことでしょうか？ それは、一人一人の子の思いが尊重されると言えます。子どもの権利の観点から言えば、「子どもの声が聴かれる」ということです。国の「はじめの100か月の育ちビジョン」では、「子どもの思いや願い」が尊重されることと書かれています（30頁参照）。乳幼児の言葉にならないようなすかな思いや願いも含めて、その子の大切な声なのです。

しかし、「子どもの思いを受け止める」というのは簡単ですが、実際の泣き叫ぶ子どもを目の前にして、その子の思いや願いとは何なのかを理解することは簡単ではありません。だから、私たちはその子の思いや願いは何なのかをあの手この手で探りながら関わるのです。そこには、単に「魔法の声かけ」があるわけではないのです。

ある園の保育歴2年目の保育士は、初めて0歳児を担当しました。新入園のA君は登園すると毎日、泣き叫んでいます。保育士は不安だらけでしたが、その子の思いを心と身体で受け止めるしかありません。それでも、泣き叫ぶ日は続きました。悩む保育士に先輩保育士は、「A君は何が好き」で、「何が嫌い」を一緒に書

き出してみようとWEBマップを書いてみることを提案しました。すると、「乗り物や歌が好きなのでは」と見えてくるがありました。乗り物の歌を歌うと、ピタッと涙が止まったのです。

そこから、この保育士に抱っこされるのが大好きになり、A君が落ち着いて遊べる環境を用意すると、保育士から少しずつ離れて遊び始めたのです。信頼関係が生まれ、心の安全基地ができ、そこから世界を広げていくことになったのです。保護者ともやりとりが続き、保護者と一緒にその子の思いを受け止めるプロセスがありました。「子どもの思いを受け止める」と言っても、決して単純ではないことがわかります。

また、なかなか思いを受け止めがたいと思える子どもの姿もあるかもしれません。

例えば、「すぐに手が出る子」「なかなか集中できない子」などのように見える子たちがいます。でも、その子を単に叱っただけでは解決しません。その子が、「なぜ、手が出るのか？」「なぜ、集中しにくいのか？」を理解する必要があります。手が出るのか？「手が出る」にはおそらく、「手が出てしまう」理由があるのだと思います。ですから、私たちはその子の見ている世界を探ろうとするのです。

ある保育士は、手が出るその子はその子のやりたい遊びにじっくり取り組めないからではないかと考え、その子の好きな積み木を電車に見立てる遊びにじっくりと付き合ったそうです。すると、「駅ね」とか「〇〇線ね」などと言葉を発し、「じゃあ、ここにテープで線路を作る」と彼の言葉に応じ始めると、すっかり落ち着き始め、そして気がつく、「手が出る」ことはなくなっていたそうです。

自身の思いが受け止められ、やりたいことが満たされる中で、安心感が生まれ、自分に自信をもって世界を広げること（挑戦）につながります。一見、ネガティブに見える行為に対して、その子がそうする意味や背景を受け止めようとするのがその子の変化につながることも大切なことです。

それは、毎日の保育の中で「あなたはどうしたい？」を大事にすることも言えるでしょう。それは、赤ちゃんのうちからです。おむつ替えでも、多くの保育士さんは赤ちゃんに「濡れちゃったの？」「おむつ替えてもいい？」などと「あなたはどうしたい？」を聞いています。子どもの思いを受け止めるとは、毎日の保育の中で、「あなたはどうしたい？」が聞かれる保育でもあるのだと思います。

大切なのは、言葉はなくても話しかけることや、思いを理解すること

玉川大学教授
大豆生田啓友



私たちが伝えたい7つのメッセージ

2

子どもの「遊び」を守りましょう

気候変動、虐待、不審者の増加など、子どもを取り巻く環境は厳しさを増しています。海外では、侵略を受けたり、難民となったり、大切な子どもの命が脅かされる状況を見聞します。子どもが子どもらしく遊ぶことができることは当たり前ではありません。平和を守り、命を守ることは、大きな前提となります。

一方で、どんな状況でも、遊びを考え、編み出す力が子どもにはあります。その笑顔に、どれほどの人が勇気づけられることでしょう。子どもの絶対数が減り、遊び方は時代とともに変わってきましたが、その想像力、創造力は変わりません。スマホ育児やICT化などにより、直接体験の機会は成長とともに失われていきます。就学前の子ども時代こそしっかり遊ぶことはとても大切です。遊びの中にこそ学びがあります。

人が人たる所以、人の活動の本質は遊びです。種としての私たちが分類される学名である「ホモ・サピエンス」の言葉を参考に、人はまさに「ホモ・ルーデンス」（遊ぶ人）であり、人の文化が遊びから生まれたことを明らかにしたヨハン・ホイジンガの著書『ホモ・ルーデンス』（1938年／講談社学術文庫、2018年）は、多くの保育者に愛読されている本です。

遊びは自由な行為であり、自らの好奇心や探究心、憧れに基づく自発的な活動です。また、目的指向型ではなく面白くて楽しくて嬉しいものであり、そこにはファンタジーの世界もあります。特に乳幼児期は、世界と出会い、人やモノ等の環境に気づき、好奇心や興味関心を持ちます。そして環境に働きかけたり、取り込んだり、再構成したりして大いに遊ぶ時期です。つまり乳幼児にとって、まさに遊びこそが学びなのです。

乳幼児に豊かな遊びを保障することは、子どもの権利の観点からも、その育ちと学びに不可欠なものです。子どもの権利条約の第31条では「子どもが、休息しかつ余暇を持つ権利、その年齢にふさわしい遊びおよびレクリエーション活動を行う権利、ならびに文化的小および芸術に自由に参加する権利」の保障が挙げられています。しかし、その実際は、課題が山積です。子どもの権利条約が守られているかを確認し

ている国連の子どもの権利委員会は、2005年に「一般的意見7号・乳幼児期における子どもの権利の実施」を著しました。第31条に関しては、遊びが乳幼児期にもっとも顕著な特徴であり、遊びを通じた創造的で探究的な経験は極めて価値のある重要なことであるのに、安全とは言えない環境、貧困、時間や場、人的資源や財源の少なさが課題として挙げられています。そして、その改善を図ることの必要性が指摘されています。

日本学術会議「我が国の子どもの成育環境の改善にむけて―成育時間の課題と提言―」においても子どものメディア接触時間の拡大や、お稽古や塾等に通う時間の増加、子どもの遊び時間の減少（特に外遊びの減少）が課題とされており、「屋外で群れて遊ぶ時間が少なくなったことは遊びを通じた身体性、社会性、感性、創造性の開発のチャンスを失うことを意味する。」（2013年、P. iv）と指摘しています。なお、メディア接触については、世界保健機関（WHO、2019年）のガイドラインでは「2歳まではゼロに、5歳までは1日1時間とすること」が示されています。乳幼児期は五感が敏感で、実体験、リアリティーから学ぶ時期であり、自発的な遊びを保障することが大切です。多くの大人は、乳幼児期の記憶がしつかりと残っているわけではありません。よって、小学

校以降の授業時間と休憩時間、勉強の時間と遊びの時間といった二項対立的な捉え方に慣れ親しんでいる場合もあるでしょう。乳幼児期の記憶が定かではないことは、発達的に致し方ないことであると思います。だからこそ保育者は、乳幼児期の遊びを通じた学びの姿を、保護者や社会に伝える努力を日々しています。

保育の実践現場では、子どもの遊びの中の育ちと学びを見取り、共感し、支え、時に励まし、時に問いかけるなどして、援助しています。乳幼児期は自己中心性が強く、好奇心や探究心も旺盛です。乳幼児期の自発的な遊びを保障すること、子どもが自らの好奇心や探究心、憧れに基づき、自分で考え、自分で選んで、遊ぶ環境を保障することが大切です。

【参考資料】

- 国連・子どもの権利委員会「一般的意見7号・乳幼児期における子どもの権利の実施」（2005年）
<http://childrights.world.coocan.jp/crccommittee/generalcomment/genecon7.htm>
- WHO「5歳までの子どもに関する運動・座位活動・睡眠に関するガイドライン」（2019年）
<https://apps.who.int/iris/handle/10665/311664>
- 日本学術会議「我が国の子どもの成育環境の改善にむけて―成育時間の課題と提言―」（心理学・教育学委員会・臨床医学委員会・健康・生活科学委員会・環境学委員会・土木工学・建築学委員会合同）子どもの成育環境分科会、2013年

乳幼児期の自発的な遊び、
自分で考え、自分で選んで、

遊ぶ環境を保障すること

神戸大学大学院教授
北野幸子



私たちが伝えたい7つのメッセージ

3

子ども自身に乗り越える力を育てましょう

「乗り越える力」はどこから生まれるのでしょうか。何かの壁にぶつかった時に乗り越える力となるのは、自分を信じる力です。自己肯定感とも言いますが、この春就学した卒園児の保護者からこんな話を聞きました。

「今日懇談があつて、どの項目ができているか、自分で〇をつけたものを見せてもらったんです。全部二重丸(◎)でした」。子どもなりにしっかりと自己評価をしたとは思いますが、やんちゃな彼が笑いながら◎をつけている様子を思い浮かべました。この屈託のない自信こそ、きっと困難にぶつかった時に、彼を助けることでしょう。

私たち大人はどんな時も子どもを否定せず、味方であること、応援団であることが、子ども自身の「乗り越える力」となると信じています。

「乗り越える力」は、将来子どもが大きくなつて、自身の課題に向き合わなければならぬ時や、苦しい状況に陥った時、また思ったような結果にならずに落ち込んだ時などに、ひとしきりその気持ちを味わったあとで、気持ちを立て直して前向きに歩んでいくために必要な力だと言えるでしょう。

こうした力を「レジリエンス resilience」と呼びます。レジリエンスはもともと物理的な強さや弾力性、復元力などを表す言葉ですが、人が困難を乗り越えて回復する力を表す言葉として注目されるようになりました。

私たちはつい、子どもたちが失敗しないで何かをちゃんとできることを求めています。ですから大人が考える「正しい」やり方を教えてそれをさせようと誘導したり、先回りして失敗しないように気を配ったりすることがあります。しかし、人は必ず失敗します。「失敗しないように」という働きかけは、大人の「失敗してはならない」というメッセージとして子どもに伝わります。子どもは大人の期待に応えよう、失敗しないようにと縮こまり、挑戦を恐れ、持っている力を発揮できなくなるかもしれません。私が教えている学生も、あるいは私を含めた大人も同じです。

一方で、失敗から学ぶのだ、学ぶことによつ

て失敗が意味を持つのだ、といった考え方もあります。それはそれで望ましい考え方の一つなのかもしれませんが、常に学ばなければならぬという圧力として子どもに覆い被さってしまうかもしれません。しかし、長い人生を考えた時に重要なのは、失敗した時に、まずは自分の気持ちを苦勞しながら立て直して、少しずつ歩みを進められることではないでしょうか。それは結果的には学びの機会となると思いますが、学ぶことを目的にしないでよいと思うのです。立ち直れば人生なんとか前に進みます。

そこでレジリエンスに注目したいわけですが、レジリエンスはまず、ものごとを楽観的に捉えたり、諦めずに取り組んだり、いろいろな解決方法を試みたり、気持ちを切り替えたりするといった、その人のあり方に関わります。しかし、もう一つの注目したい側面は、周りの人の力を借りることができる力であるという点です。苦しい状況に陥った時に、自分だけで乗り越えようとしても難しいことは人生にたくさんあります。ですから助けを求める力が大切です。失敗できないという圧力が強いと、失敗を認めて助けを求めるということが難しくなるので、人は失敗するという前提を忘れないことです。

では乳幼児期に「乗り越える力」を身につけていくために、どのようなアプローチが有効で

でしょうか。崖から突き落として這い上がつてくる力を呼び起こすことででしょうか。

そうではなく、その手前をしっかり固めるのです。子どものありのままを認めることが出発点です。できたらほめて、できなかったらがっかりしたり責めたりするといった評価者のような関わりではなく、できたら一緒に喜び、できなかったら一緒に残念がる、子どもの姿や気持ちをそのまま受け止めて寄り添うような共感的な関わりです。そうすれば子どもは孤独ではありません。いつもわかってくれようとする人が傍にいる。だから失敗を恐れる必要がなく、安心して、今の自分より少し背伸びをして挑戦できます。挑戦がうまくいかないような時には、自分でやろうとする姿を見守りながら、子どもが求めていそうなら一緒に考えたり、少し手を添えたりしながら一緒にできたという経験を重ねましょう。助けてもらうことで前進するという経験が今度は自分だけでという挑戦につながります。

そんな子どもとの日々を慈しんでいくことが、長い目で見ると、「乗り越える力」につながっていくのではないのでしょうか。

子どもとの日々を慈しんでいくこと…一緒に喜び、一緒に残念がる

和洋女子大学教授
矢藤誠慈郎



私たちが伝えたい7つのメッセージ

4

子どもの「自分でやりたい」を大切にしましょう

子どもは2歳を過ぎると、「何でもできる」という万能感をもちます。できる、できないにかかわらず、何でも挑戦しようとしています。人に言われてするのが嫌な、いわゆる「いやいや期」です。

そんな時に大人が先回りして、無用なアドバイスをしたり、手を出したり、自分でやらせなかったりすると、せっかくの失敗のチャンスを失います。

「失敗は成功のもと」。子どもの「ものづくり」は始まっています。失敗を楽しみながら見守るのには時間がかかりますが、心に余裕のある時は付き合ってみましょう。

ヒトという生物は、生まれる前から子宮内をぐるぐると回転したり、指吸いをしたり、子宮の壁を押してみたりと、身体を頻繁に動かして外界を探索しています。生まれてからは、身の回りにあるものに手を伸ばし、なめたり叩いたり放り投げたり、と一心不乱に探索する姿をよく目にします。こうした子どもたちのふるまいは、大人から見ると一見無意味なように思えます。では、なぜ子どもたちはこうしたことに夢中になるのでしょうか。それは、自分の身体を使って感じる体験が、子どもの脳や心に驚きや興奮をもたらすからです。自分で「実験」を繰り返すことで偶然発見した何か（物理法則や因果、論理など）に驚き、興奮しながら、子どもたちは主体的に知を創造していくのです。

何かを体験することで驚いたり、興奮したりする時、脳内ではドーパミンという神経伝達物質が放出されます。ドーパミンは、好奇心や学習の動機を高める働きをもっています。この一連の神経活動は報酬系と呼ばれていますが、こうしたしくみは他の動物でも共通して見られます。ヒトだけでなく、ヒト以外の動物も子ども期にはよく遊びますが、それは、自分の「やりたい」をやってみる、つまり、遊ぶことによって報酬系の活動が高まり、外界に適応するための学びが進んでいくという、進化上の適応的意義があるからです。

ヒトの育ちに話を戻しましょう。こうした「やりたい」をやってみる過程において、私たちが知っておくべき重要な点が二つあります。まず一つめですが、子どもが何に関心をもち、何をやってみたいかは、それぞれ異なっている、多様であるということです。大人になると、これは正しい、これは大切といった信念、先人観が心を無意識に支配しがちですが、子どもはまったく違います。子どもたちが何に驚くか、興奮するかは、自分でやってみないとわからない。実際にやってみて、脳内にドーパミンが高まっていく瞬間を体験する。それが、それぞれの子どもたちのもっと知りたい、やってみたい、つまり知の創造へとつながっていくのです。

もう一つの重要な点、こちらは、ヒトだけに見られるユニークな特性です。先述のように、子どもたちは自分でやってみることで驚いたり、興奮したりするのですが、面白いことにそれを自分だけの体験にとどめません。自分の驚きや興奮を「お母さん、見て見て！」「先生、あのね！」と、誰かと共有したがる性質をもっているのです。そして、子どもからその驚きを共有された大人は、「すごいね！」「一緒にやってみよう！」などと、ポジティブなフィードバックを返します。こうしたやりとりは、ヒトにもっとも近縁なチンパンジーですら見られません。ヒトの脳は、自分が得た驚き、興奮、喜びを誰

かと共有することでドーパミンの放出を持続させる、つまり、学習の動機がいつそう高まっていくように仕組まれているのです。

* * *

今、私たちは、人工知能（AI）と共生する時代を迎えました。AIは、ヒトの能力をはるかに超えた大規模データの収集と演算処理を行う能力をもつ存在です。これまで私たちが担ってきた仕事や役割の多くが、AIに任されるようになっていくでしょう。

ところで、AIも、日々学んでいます。そこでの学びは、インターネット上の情報を使う多数の者が「有益・正解」と判断する情報を選びながら更新される設計に基づくものです。これは、これまでお話ししてきたヒトらしい学び方とは大きく異なっています。

AIにはできないヒトの知性の根幹は、創造性です。自分でやってみたいことをやってみる。その体験から得た驚き、感動に導かれながら自ら知を創造していく。そして、その体験を誰かと共有しながら、もっと知りたい、もっとやってみたいという動機を高めていく。これが、ヒトの学びの本質です。AI共生時代の今こそ、子どもたちの「やってみたい」を大切にしたい、ヒトの創造性を育むための環境を提供していくことが必要です。

AI共生時代の今こそ、自分の「やりたい」をやってみる

京都大学大学院教授
明和政子



私たちが伝えたい7つのメッセージ

5

子ども同士の関わりが大切です

おうちの人と家にいた赤ちゃんが、散歩に出かけるようになると、いろいろな人に出会います。「世の中にはいろんな人がいるんだな」。周りに多様な大人がいて、子どもはそう感じます。お店のレジ係りの人、工事をしている人、ガードマンさん、車椅子のお年寄り……。

大人との関わりから、公園デビューや保育園・こども園、幼稚園などでの生活を経て、友だちに出会います。大人との関わりを経験し、周囲の人に関心をもつことから、子ども同士の関わりは始まります。関わることから教え合い、高め合い、時にはケンカもして、思いやりの心が芽ばえます。

ヒトは、種独自の認知能力を進化の過程で獲得してきました。その代表的なものの1つは、他者の心を自分の心と切り離してイメージする、つまり、相手の立場に立って物事を推論するという社会的な認知能力です。これを「メンタライジング」と言います。メンタライジングという心の働きを起こす中心は、前頭前野と呼ばれる脳の場所です。おでこの奥の方にあります。

前頭前野は、環境の影響を受けながら25年以上という長い時間をかけて発達していきます。その過程において、前頭前野が特に目立って発達する時期（感受性期）が2つあります。幼児期後期と思春期です。

感受性期の第1期にあたる生後4年目頃、ヒトは自分と他者の世界の見え方を区別し、イメージできるようになります。例を挙げましょう。図1にあるように、自分と他者の間に仕切りを設け、それを挟んで自分の側にペンを置きます。この時期になると、自分にはペンが見えているけれども、他者からは仕切りが邪魔をしてペンが見えていないことを理解できるようになります。こうした認知能力は「視点変換」と呼ばれています。

視点変換を獲得すると、子どもたちはさらに複雑な認知能力を発達させていきます。他者の心の状態を頭の中でイメージし、さらにそれを柔軟に操作する能力です。相手の心を場面に応

じて柔軟に推し量ることは、複雑なヒトの社会で生きていくために不可欠です。幼児期後半になると少しずつイヤイヤ行動が収まり、相手の立場に応じたふるまい（年少児を助ける、なくさめる、自分の感情を抑制するなど）が見られるようになるのは、このような変化が脳内に起こっているからです。その意味においては、イヤイヤ期の卒業とは子どもの心が成長したから、というよりも、前頭前野の発達が進んできたから、と理解する方が妥当かもしれません。

この時期の子どもに特に提供したいのは、多様な他者と触れ合う経験です。コロナ禍以降、そうした経験を得ることは大人ですら減ってしまっている気がします。大人もそうですが、なじみのない、自分とは遠く感じる他者の心を理解することは、自分とは似た、あるいは親しい他者の場合と比べると容易ではありません。それは、前頭前野で視点変換を起こし、場面に応じて相手の心を適切に推論する必要がある、つまり、より大きな認知負荷がかかるからです。つまり、子どもたちが、異年齢、肌の色、言語、文化の違いなど、自分とは異なる多様な他者と関わる日常の経験は、子どもたちの前頭前野を活性化させ、発達させる重要な教育の機会と言えます。

この数十年で、私たちが生きる環境は激変し

多様な他者と触れ合い、喜怒哀楽をぶつけ合う真の体験を



図1 他者の心を理解するには、自分の心と他個体の心はそれぞれ独立したものであることを理解し、他者の視点や心の状態をイメージ、推論する能力（メンタライジング）が必要となる。この能力は、生後4年目頃に顕著に発達する（明和、2021）

ました。SNSなどの仮想空間が現実空間と融合した、新たな環境での生活が始まっています。それは、ヒトが数十万年かけて適応してきた環境とはまったく異なる環境です。現実空間では、子どもたちは養育者をはじめとする身近な他者だけでなく、さまざまな価値観や考え方、外見をもつ者との出会い、リアルな体験を得ることができます。これは、自分とは異なる他者の心をどう受け止めるべきか、理解すべきかを深く思考する、社会で生きるためのトレーニングとも言えます。しかし、仮想空間はそうした経験を避け、逃げ込むことのできる選択肢を与えます。自分の心のみに固執し、閉じこもることができる空間です。現実空間において、子ども同士で喜怒哀楽をぶつけ合う真の体験は、生涯にわたるウェルビーイング（身体的・精神的・社会的に良い状態）を支える土台となるのです。

京都大学大学院教授
明和政子



私たちが伝えたい7つのメッセージ

6

みんなで食べると美味しいんです

「家ではまったく食べないものを、園ではパクパク食べていて驚きました」。保育参観でよくいただく感想です。

コロナ禍ではいつもより静かな昼食の時間でしたが、集団の力、友だちの力で、嫌いなものもだんだんと食べられるようになります。

園ではテラスで食べたり、園庭にシートを敷いて食べたり、自分たちの作品を展示している会場で食べたりと、いろいろな工夫をしています。嫌いな野菜も自分たちで世話をして収穫すると、一味違います。また、1日1回外遊びをすることも、食欲増進のポイントです。

おうちでも、遠足ごっこや、家庭菜園などを取り入れるなど、楽しい食事を意識してみましょ。

園でお腹いっぱい食べることが出来る毎日の食事は、子どもたちが「食べることの楽しさ」を実感しながら成長していく大切な機会です。午前中のたくさんさんの遊びや学びによって、お腹が空いて食べる食事の美味しさが高まります。

毎日の食事には、それぞれの季節や行事に合わせた献立が考えられ、毎日違った食材を用いて、さまざまな調理方法を駆使した料理が安全に提供されています。そのような食事を食べながら、子どもたちは食べ物大切さを学び、友だちや保育者と一緒に食べることを通じて、豊かな心を育んでいきます。

1 「みんなで食べることの大切さ」を理解する

食事は栄養補給の手段だけではなく、人間としての社会的な経験を積み重ねる場でもあります。特に幼児期は、周囲の人と一緒に食べることが通じて、さまざまな経験や学びを得ることが出来ます。

① 食べる楽しさを感じる

友だちや保育者と一緒に食べることで、子どもたちは「食べることが楽しい！」と実感し、毎日の楽しい食事を積み重ねることで笑顔が増えていきます。

② 食べる体験を積み重ねながら学ぶ

食事の時間は、社会性を学ぶ大切な場面でもあります。感謝の気持ちをもつこと、食器と食具の扱い方を身につけること、それぞれの料理の食べ方についての基本的な作法を身につけることが出来ます。園で大人が見本を見せながら、

楽しく食べることがとても大切です。

③ 食欲が増す、偏食の改善にもつながる

偏食がある子ども、友だちが美味しそうに食べていると、食べてみようという気持ちになります。楽しい雰囲気の中で食べることは、苦手な食材にも挑戦するきっかけを与えてくれます。

2 「みんなで食べるの美味しい」の気持ちを高めるために、保育室と給食室でできること

① 午前中からお腹を空かす

お腹が空いて食べることでこそ、美味しい食事の基本です。

② 食事の前にごそ、食事に向かう気持ちを高める言葉かけを行う

「いい匂いがしてきたね」「たくさん遊んだからお腹が空いてきたね」「今日のお給食は何かね」「美味しそうだね」「早く食べたいね」など、保育者の皆さんが「食いしんぼうの保育者さん」を演じてください。

③ 食事の場所そのものの雰囲気づくり

園の給食で出される食材の実物大の掲示物があると子どもたちの興味も高まります。献立立案時には「白身魚のフライ」ですが、実際に納品された魚がわかった時点で、子どもたちには正しい魚の名前を伝えていきましょう。

④ 食事中に子どもたちの耳に届ける言葉をポジティブにする

「今日のニンジン、甘くて美味しいなあ」などのように、食品名とその食品が美味しい理由を丁寧に言葉にしていきましょう。「美味しい」の

強要はやめましょう。「美味しさ」や「楽しさ」は子どもたち自らが実感するものです。

⑤ 気軽な会話を楽しみながら食べる

「○○ちゃんは△△が大好きなんだよね」など、子どもたち一人一人の食事へのこだわりを覚えて、「今日は大好きな食べ物が入っていて嬉しいね」と、食べる喜びを拡げていきましょう。

⑥ 子どもたちの「食べっぷり」を評価して給食やおやつ献立を改善する

安全な食事を提供しただけで終わっていませんか。子どもたちの毎日の「食べっぷり」を正しく評価して、献立を改善し続けましょう。献立こそ「子ども中心」です。

⑦ 食物アレルギー対応こそ「みんなで食べると美味しい」の環境を

食物アレルギーをもつ子どもたちがみんなと離れて「ひとりぼっち」で食べる「悲しい環境」をつくっているのは献立作成者（栄養士）、その環境を改善できるのも献立作成者（栄養士）です。「みんなで食べると美味しい」を実現できるように配慮した献立を立案しましょう。

3 保育者の関わりが子どもたちの食体験を豊かにする

「みんなで食べると美味しい」この言葉を大切に、子どもたちと一緒に楽しく食事の時間を過ごしていきましょう。そして、子どもたちが食べることを好きになり、これからも健康的な食習慣を身につけられるよう、温かいサポートを続けていきましょう。

「みんなで食べると美味しい」を実感できる毎日の食事を大切に

上越教育大学大学院教授
野口孝則



私たちが伝えたい7つのメッセージ

7

子どもは自然が大好きです

子どもにとって身近な自然は園庭の木、草花、虫たち、保育室や家で飼育する昆虫です。太陽の光、水、美味しい空気も大好きです。

園の傍に川があれば川、山があれば山、海があれば海、公園があれば公園を保育に取り入れて楽しんでいます。加えて川、山、海、公園などで遊ぶ前に、みなでごみを拾うと環境問題にもつながります。

コロナ禍では、おうちからも密を避けて近場の自然に親しむ機会が増えたことは、「正の遺産」だったのではと感じています。暑いし、寒いし、戸外に連れ出すことを負担に感じることもあるでしょう。でも、遊びが無限にある自然の中での遊びが、子どもは大好きです。

「お外行こうか」の声をかけを、子どもは待っています。

私たちはヒトは自然の一部であり、自然の中に生きる存在です。子どもは自然の中で情緒が安定します。またヒトやモノと触れ合い、好奇心や探究心が育まれ、伝え合ったり、共感したりします。豊かな自然体験は豊かな言葉でのコミュニケーションや、想像力を育みます。外遊びは、子どもの体力の向上や、体幹を育み、自らが危険を察知して対応し、安全で健康に生活する力を育みます。幼児期に大好きな自然と触れ合うことにより、豊かな感性や、好奇心、思考力、表現力の基礎等、生きる力の基礎が培われます。

レイチェル・カーソンの『センス・オブ・ワンダー』（1965年／新潮社、1996年）は、多くの保育者に愛読されている本です。同書では、幼児である姪の息子が、自然と触れ合う中で、いかに美しいものを美しいと感じ、新しいものや未知なものに触れ感激し、そしてさらに探究したくなる様子が描かれています。

乳幼児期が自然と触れる時、「センス・オブ・ワンダー」、つまり「不思議だなあ、面白いなあ、なぜだろう」といった気持ちが湧き上がります。自然と触れ合うことにより、人やモノと関わろうとする気持ち、もっと関わりたい、もっと知りたいという気持ちが育まれていくのです。

「平成28年度全国体力・運動能力等調査」では、幼児期に外で体を動かす遊びの習慣が形成

されていると、小学校入学後の運動習慣の基礎が培われていること、また、体力の向上につながる要因の一つになっていることも明かにされています（スポーツ庁、2016年）。国立青少年教育振興機構による高校生対象の調査では、自然体験が多いほど、思いやりや、やる気、人間関係能力等が高いことも明らかになっています（2020年）。昨今、人間関係で悩み、生き辛さを感じる子どもの多さが指摘されています。子どもたちの心身のウェルビーイングを實現するためにも、自然と触れ合う機会を大切にしたいものです。

生態系の一部である私たちは、誕生してから自然と出会い、触れ合い、自然の中で育ってきます。子どもが自然と共存し共生していく、その自然環境が人工的なものにより脅かされていることは大きな問題です。環境問題が深刻化し自然が破壊され、自然と触れ合うことにより五感を活用したり感受性を豊かにしたりする機会が損なわれ、それらが人と関わる力の育ちにも影響を与えてしまうことが指摘されています。乳幼児期からの子どもたちの育ちを支えるために、「環境教育等による環境保全の取組の促進に関する法律」の第9条では、「国、都道府県及び市町村は、国民が、幼児期からその発達段階に応じ、あらゆる機会を通じて環境の保全についての理解と関心を深めることができる

よう、学校教育及び社会教育における環境教育の推進に必要な施策を講ずるものとする。」としています。

保育者は、自然が大好きな子どもの気持ちに寄り添い、子どもが自ら自然と触れ合おうとする気持ちを尊重しています。園では、季節を感じるができる環境、動植物と触れ合う環境、黙々とダンゴムシを集めたり、延々とどろだんごを作ったりする場と時間を保障し、子どもの育ちを支えています。豊かな自然を守り、子どもが自然と触れ合う環境を守り、その機会を保障していくことは、今後ますます大切であると考えます。

【参考資料】

環境省大臣官房総合政策課環境教育推進室「幼児期における環境教育体験活動事例集『環境教育で持続可能な地域へ』（2020年）

国立青少年教育振興機構「令和2年度『体験活動等を通じた青少年自立支援プロジェクト』 青少年の体験活動の推進に関する調査研究報告書」（2020年）

スポーツ庁「平成28年度全国体力・運動能力等調査結果」（2016年）

ウェルビーイングを實現するためにも「センス・オブ・ワンダー」を

神戸大学大学院教授
北野幸子

保護者のみなさまへ
私たちが伝えたい

「7つのメッセージ」



1

子どもの思いを受け止めましょう

0歳からのお子さまをお預かりする保育施設では、言葉が未熟な年齢でもあるために、子ども一人一人の状況や表情を把握しながら、ニーズや思いへの対応を行っています。

特に近年では、赤ちゃんが「泣く」という仕草にも何かを伝える意図があつて、自ら思いを伝えようとする力を既にもっていると言われています。また、片言の言葉を発する時期では、自分の思いを伝えようとしてもうまく伝えられなくて、ぐずったり、「いやいや」を連発することがあります。

さらに、お友だちとの関わりが増えてくると、意見のぶつかり合いに出会ったり、自分の思いを調整することを求められる場面も体験します。そのため、自分の思いを理解してもらえないことが大きなストレスになるのではないかと考えられます。

これらのことから、保育者は、ていねいに子どもたち一人一人の話を聞き、伝えたいことを整理することや、共感して思いに寄り添う言葉かけを日々行っています。

例えば……

乳児のオムツ交換の際には、「気持ち悪かったね!」「交換してスッキリしたね!」など。

幼児クラスでの子ども同士のトラブルなどでは、「○○ちゃんの思いはこうなんだね!」「○○ちゃんはこれがイヤだったんだね!」など、双方の思いを認めること。

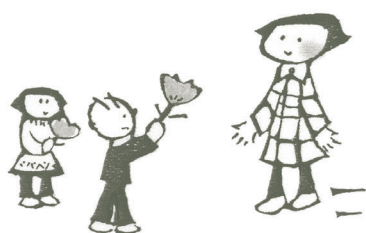
といった言葉かけを大切にしています。

一方、ご家庭では「親とわが子」という関係

性から、やってあげることや失敗しないようにとの思いが先行してしまったり、保護者自身の経験や成功体験に基づいた声かけをついつい押しつけてしまいがちではないでしょうか?

子どもの声を「率直に聞く」ということは難しいと思われてしまうかもしれませんね。でも子どもは、自分の近くにいる存在である大人に自分のことをわかってほしいとの思いがあります。ぜひ、ご家庭でも、少し意識してお子さまの声に耳を傾けてみてください。

子どもにとって、自分の思いを大人に聞いてもらえること、また、共感してもらえることだけでも、相手との信頼関係をもつことにつながります。大人も童心にかえり、目線を合わせて考えてみることで、子どもの素直でやさしい思いに気づいたり、日々成長し「考える」力をつけている姿を発見できると思います。



保護者のみなさまへ
私たちが伝えたい

「7つのメッセージ」



2

子どもの「遊び」を守りましょう

赤ちゃんの行動に、自分の手やものを口に入れる行為があります。それは、赤ちゃんにとって遊びの一つと考えられています。その「遊び」は、赤ちゃんが生きていくうえでたくさんの感覚を学ぶ大切な行為となります。

「遊び」という行為は、年齢を重ねるごとに一人遊びから集団の遊びへ変化していきます。例えば、雪が降った時に、雪を一生懸命に手に載せようとすると手に触れた瞬間に溶けていくでしょう。不思議に感じて、何度も雪を手に乗せることを繰り返していくと楽しくなる。その後、周りの友だちにも不思議さの共感を求めることで「遊び」が発展していきます。

このように乳幼児期に経験したすべての「遊び」は、「学びの芽ばえ」から「自覚的な学び」へとつながる大切なものなのです。

現在の私たち大人は、テレビやポータブル機器で子どもたちに動画などを観せることで、子どもたちの成長よりも、おとなしくなり手がからなくなることが優先しがちになっているように感じます。もちろん子どもたちに動画等を観せることで新しい喜びを感じ、そこで学ぶことも多くあると思います。しかし、乳幼児期は五感が極めて発達する時期です。動き回って実際にものに触れたり、匂いを嗅いだり、音を聴いたりすることを優先して、大切にしてほしいと思います。

遊んで服を汚してしまったたり、思う通りにならずに泣いてしまったり、少しケガをしたりと子育て中は大変なことだと思います。け

れども、子どもたちの「やってみたい」を大切にすることが、子どもたちの将来の生きていく力に必ずつながります。

おままごとも、電車遊びも、子ども自身の意思で好きな遊びを創作し没頭する。それは、大人が必要以上に関与や干渉するべきことではなく、ただ遊びの機会を保障することが大事なのです。何をするのか、誰とどうやって遊ぶのかは、子ども自身が考えます。「遊び」の中では子どもたちの道徳心さえも育っていくものだと思います。

今も、これから先も、子どもたちに実際に触れるものや見えるもの、子どもたちが感じるすべてのものが、子どもたちの未来をつくります。そのために私たちは、子どもの「遊び」を守らなければならないし、守ることが大切だと思うのです。



保護者のみなさまへ
私たちが伝えたい

「7つのメッセージ」



3

子ども自身に乗り越える力を 育てましょう

乗り越える力を育てる、難しそうですね。でも、次のどれか一つからでも始めてみませんか。

【いい調子】

「早寝、早起き、朝ごはん」、または「早起き、早寝、朝ごはん」。子どもがご機嫌であることはとても大切です。小さな子どもは自分で生活習慣を整えることは難しく、まずは保護者の皆様の生活習慣が影響します。とはいえ、現代社会では夜間に就労される方も多く、悩ましいですね。でもそこは未来志向で、「子どもに合わせて生活する時期」と割り切って、子どもを寝かせてから自分は復活するなど、工夫が必要です。一緒に布団に入って寝たふりをする 것도、よい思い出になりますよ。上機嫌な子どもは、いろいろやってみたくなるものです。

【みんながいるから】

屋内外の遊戯場に行つて、こんなことを感じたことはありませんか。友だちでなくても人が多いと遊びが長続きする。少し難しい遊具の前に躊躇（ためら）う子が、スイスイこなす他の子を見てトライする。失敗する。怖い思いをする。できる子をじつと観察する。もう一度やってみる。失敗の度合いが減ったと感じる。何回もやってみる。できた！ 特に一ツ年上など年齢の近い先輩の様子を見ることが、真似をすることは、乗り越える力を育てます。

またこんなことも。給食に苦手の野菜が……。目の前でリカちゃんが美味しそうに食べてい

る。先生も「食べなさい」なんて言わないで、「美味しいねえ、これ。給食の先生、頑張ったね」とやさしく声かけをしている。恐る恐る食べてみる。「オエー」やっぱ無理。でも、先生もリカちゃんも褒めてくれた。一口から完食へ。「家ではやめとくけどね」

【施設応援団】

多くの保護者の皆様が、日頃から「子どもを褒めて育てよう」と意識されていると思います。ただ褒めることは意外と難しく、日々の保育の中で感じることをお話ししましょう。

まずはタイミングです。子どもにとって一日は長く、お昼寝をすると、起きたら翌日の感覚になっていることがあります。見逃さずすぐに、は大事です。次に、具体的にほめること。「元気に挨拶できたね」「トイレのスリッパが揃っていて気持ちいいね」など。後はこっそり耳元でほめるのも効果的です。自分が見守られている、大切に思われているなどの経験が、自己肯定感となり、挑戦する力になります。



保護者のみなさまへ
私たちが伝えたい

「7つのメッセージ」



4

子どもの「自分でやりたい」を大切にしましょう

子どもの頃、たくさんの失敗や痛い思いをした経験が皆様にもあると思います。その経験が今生きていることの糧になったことも多いのではないのでしょうか？

思い出してください。失敗や痛い思いをした時、自分はどんな気持ちでその行動をしたのか……と。「絶対失敗するぞー」「必ず痛い思いをするぞー」と思っていないか？ 怖いもの知らずだったはず。だからこそ失敗や痛い思いを経験することができて、宝物を得ることができたと思います。

今、そんな経験を踏まえて大人になり、親になった私たちが、同じように宝物を得ようとしている子どもたちから、大切な経験を奪ってしまつことが多くなつてはいないでしょうか？

成功する道筋を先に教えてしまつたり、危ないからと、遊びに歯止めをかけてしまつたり……と。

大切なことは結果ではなく、溢れる興味と、向かう勇氣、やり遂げようとする強い気持ち、成し遂げた時の達成感と自己肯定感なのではないでしょうか。そんな宝物を得ようとしている子どもたちを、温かい目で見守ってほしいと思います。

家族団らんの時間、テレビではクイズ番組が放映されていました。問題が出されて、子どもは一生懸命考えているのに、先に答えを言ってしまうお父さん。お母さんからの冷たい視線(笑)。子どもは答えを知ることができましたが、考えることはできませんでした。すぐに答えを

忘れてしまうことでしょう。自分で考え導き出した答えではないから。だったら、一生懸命考えて間違つた方がまだよかったかもしれませんね。

朝は、どこのご家庭も大忙し。玄関で、自分で靴を履こうと頑張る子ども。お母さんが「急がなきゃ」と焦る気持ちは十分わかります。でも片方だけでよいから、「自分で」と頑張っているわが子の気持ちを大切にしておいてもらえませんか？

「口に入るより、溢している量の方が多いのでは？」と思うような食べ方のわが子。でも、小さい手で、不器用ながら力強く生きようとしている姿です。

子どもの「自分で食べたい！」「自分で！」という思いを、大切にしておいてください。



保護者のみなさまへ
私たちが伝えたい

「7つのメッセージ」



5

子ども同士の関わりが大切です

乳幼児期の心の発達には、愛着の形成が大切です。ここで言う「愛着」とは、簡単に言えば子どもと保護者や保育者、他の友だちとの間に生まれる心の絆です。

愛着が形成されていくと、子どもたちの人間に対する基本的信頼感が育まれ、その後の心の発達、人間関係に大きく影響します。

大好きなパパやママからたくさん愛情を受けることはもちろんですが、子どもたちをとりまく多くの大人との愛着形成ができると、次は子ども同士の信頼関係が形成されるようになります。結果的に、「他者と一緒にいることが楽しい」と感じるようになります。

子どもたちの発達には、大人との愛着形成は大事です。同様に、子ども同士の信頼関係づくりや関わりが大切です。

例えば、ダンボールで基地遊びを行っている時には「どつやつて作る?」「何がいる?」など、たくさんのお話が飛び交います。もちろん意見が合わず言い合いになることも。けれども、それを解決するの子どもたちの力です。「ここを持って!」「大丈夫?」「できた!」と言いながら、子どもたち同士でお互いを認め合い、作り出す力が自然に形成されます。

乳幼児期は、特に子どもの発達に差がある時期です。大人からの話をすぐに理解できる子どももいれば、理解が難しい子どももいます。

子どもたちは、できなくても、隣にいる友だちの姿を見ながら真似をすることで理解していきます。「わからない」なんて言わなくても、

友だちと一緒にやって行動し、考えてくれるのです。

発達段階において子ども同士の関わりは、大きな意義があります。

また、子どもたちは、言語が異なり、言葉が通じない国の子どもたちと、会話がなくても手をつないで遊んだり、笑ったり、大人ではできない特別なコミュニケーション力もっています。子どもたちには互いに育ち合う不思議な力があるのです。

子どもたちが、これから豊かなコミュニケーション力を高め、お互いを尊重し、多様性を認めながら成長するためにも、子ども同士の関わりが大切だと考えます。



保護者のみなさまへ
私たちが伝えたい

「7つのメッセージ」



6

みんなで食べると美味しいんです

「食えること」は「生きること」。この言葉をよく見かけませんか？ どこか身近であって、どこか責任を感じる表現でもあり、どこか遠く離れた言葉に聞こえたりすると思います。日々、子どもたちと一緒に生きている私たちですが、改めて「食」を見つめると、「みんな子どもだった」ことを思い出すと、「食えること」は「生きること」が見えてくると思います。

赤ちゃんは、授乳時期から「食」は始まっています。まだ目が見えていなくても、大人の声を聞き、体温を感じ、心地よさの中で「食」を摂ります。離乳食が始まる頃は、大人やきょうだいが食事をする姿を見て、「食べたい」とよだれが出始める時期です。意欲的な「食」には必ず傍に誰かがいます。

園生活では、友だちの存在がとても大きいです。苦手なピーマン、隣の席の子がおかわりしていたから食べてみた！ 友だちと育てたキュウリ、サラダに入れたら美味しかった！ お泊り保育で食べたカレーライスのニンジン、いつもと違う夜の過ごし方が嬉しくて、おかわりした！ など、日常の食事の「楽しさ」や「経験」から心が動かされ、意欲的な食事になります。子どもが楽しんで食えることは、食への意欲や関心を高め、偏食も減っていききっかけとなり、また「美味しい」を共有することで、人の気持ちにも関心をもつようになります。すると、友だちやさまざまな大人と関わる園生活だけで「楽しい食事」を経験できればよいのではと感じるかもしれません。

ここで、自分の子どもの頃に帰ってみてください。「食事」の中のポジティブな記憶、ネガティブな記憶はたくさんあると思います。その記憶の中には、YouTube やケータイと向き合っている自分はいないと思います。食卓には言葉やまなざしがあり、感謝や涙もあつたと思います。

毎日完璧に手作りしなくてもいいんです。全然食べてくれないわが子にため息が出ても、そこは「園で食べているからいいか」と上手に変換してください。子どもには、家族と一緒に食卓に座る日常こそが心の栄養になっていると信じてください。家族との食事の土台があるからこそ、外での慣れない環境でも「みんなで食べると美味しいね」と感じられる心が生まれます。嬉しい記憶、美味しかった記憶はポジティブなものとして残り、一方的なものでも強制されるものでもなく、子どもたちにとって生涯生きていくための活力になります。



保護者のみなさまへ
私たちが伝えたい

「7つのメッセージ」



7

子どもは自然が大好きです

朝起きてカーテンを開けると、お日様の光が降り注ぎます。まだ眠い子どもも、その日射しのまぶしさで、だんだんと目を覚ましていきます。日の光を浴びることで、一日の生活リズムが整うと言われています。お日様という自然の力です。しっかりと朝食を食べて、保護者のみなさんの家事が落ち着いたら、さあ出かけです。「お片づけをして、お外行くよ」の声かけで、いそいそと玄関へ向かいます。

一人で歩けるようになれば、頭部保護、熱中症予防や保温のために、(嫌がらなければ)帽子を被ることをお勧めします。また、暑くても寒くても、お茶などの飲み物を持って行きましょう。

準備ができたらさあ出発。「今日はどこへ行くのかな?」

目的地まで車でというご家庭も多いと思いますが、歩くこと(お散歩)で自然との関わりがぐんと増えます。公園があれば公園へ、川があれば川へ、あぜ道があればあぜ道へ、でいいのです。道端の花を見つけて香りを楽しんだり、そくと触ってみたり、犬や猫、鳥たちに声をかけたり、日向の暖かさ、日陰の涼しさなども感じながら、お散歩を楽しみます。目的地に着くまでの寄り道は子どもにとっての宝物です。

雨の日は湿った空気や雨音が子どもを包みます。サッシを伝う雨粒も、子どもには不思議な生きもののように、注意を引きつけます。一日

中雨で外に出られない時も、少し窓を開けて外気に触れたり、飾ってある花や水槽の魚、虫かごにいる虫たちを眺めることができれば、自然に触れたいという子どもの欲求に応えられます。図鑑や絵本で、昨日公園からポケットに入れた帰ったものを調べたり、並べたり、興味、関心に応じた楽しみ方ができます。

子どもは胎内で羊水に包まれ、身近な大人の体温を感じ、外気に触れ、大地を這い、育っていきます。泣いている赤ちゃんを抱っこしてベランダに出ると泣き止むのは、風や匂いなど、目の前に広がる未知なる自然を敏感に感じ取っているのでしょう。

暑い、寒いと戸外に連れ出すことを負担に感じる時もあります。でも遊びが無限にある自然の中の遊びが、子どもは大好きです。「お外行こうか」の声かけを子どもは待っています。



いつもの保育の中で

7つのメッセージ」を 実践してみませんか!?

メッセージー

子どもの思いを受け止めましょ

……ピーステーブル

子どもたちの成長を見守る立場では、どうしても大人目線での指示や援助をしてしまいますが、子どもから見ると違う思いがある場合もあります。決めつけや慣れではなく、子どもたちに思いを聞いてみることも重要です。また、思いを受け止めることは、子ども理解や信頼関係の構築にもつながります。

0歳からの保育では、オムツ交換に代表される保育者による一方的な援助が主となりますが、同時に「スッキリしたね!」などの声かけを行い、言葉で子どもたちの気持ちに寄り添うことも大切に行っています。さらに、食事の際に「美味しいね!」、遊びの中で「楽しいね! 面白いね!」と共感することでも、子どもとの関係が深まり、思いを受け止めてくれるという信頼から「愛着関係」が培われます。乳児保育では十分に言葉を遣ってのやり取りは難しい状況にあります。理解は進んでいるとも言われています。

また、子どもたちの集団の場である保育

施設では、同じ行動や同じ考えが生じるために、共感して楽しむことや力を合わせて何かを成し遂げるという協働性が育まれる一方、同じだからこそ起きる、トラブルやぶつかり合いが生じます。特に保育施設では多くの子どもたちが関わり合うがために頻繁に発生することで、保育者による直接的な介入により、大人の視点でジャッジし解決してしまうことが多くあります。

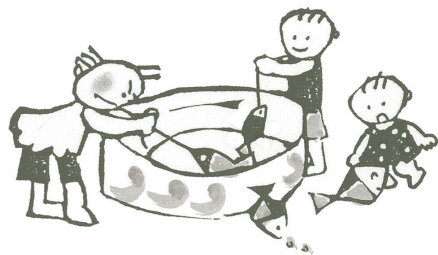
ある日の3・4・5歳児のクラスで、何人かの子どもたちが、お部屋の一角でケンカが始まったことを伝えて来ました。その場では「A君がB君をぶった!」と周りの子どもたちが伝える中、当人同士は険悪なムードで睨み合っていました。叩いたことは子どもたちの話からも事実であるようにしたので、謝罪をさせて仲直りという流れで声かけをしましたが、叩かれた子はなかなか許すことができませんでした。

その場を見守っていると、その子が小さな声で「なんで、ぶちたくなったかを教えてほしい!」と告げました。このやり取りを受けて、大人視点の考えと、子どもたち

の中での思いには違いがあるということを感じました。

その後、お互いの思いを伝え合い満足した様子で、遊びに戻っていききました。

この件もあり、子ども同士の会話を重視するために、コーナー保育の一つとして「ピーステーブル」という場をつくり、トラブルや問題が起きた時に子どもたちで話し合える場を設けました。また、ここでは大人の指示や一方的な介入をするのではなく、大人は近くで見守り、子どもたち同士での会話が十分できることを大切にしています。そして、ピーステーブルは、いつでも子どもたちが必要に応じて利用できるように環境を整えています。



いつもの保育の中で

7つのメッセージ」を 実践してみませんか!?

メッセージ・2

子どもの「遊び」を守りまじょう

……平和の中で「遊ぶ」「学ぶ」環境を

私たち大人は、「遊び」と「学び」を対立的に考えてしまいます。けれども、子どもたちは、自らが考える主体的な遊びの中で多くのことを学んでいます。子どもにとっては遊びこそが学びであり、その機会を保障していくことが私たち大人の使命です。

例えば、砂場遊びで「どうやったら大きな山の下にトンネルを掘ることができるか」といったことを、友だち同士で工夫していきます。何度も何度もやり直しては話し合います。出来上がった時の喜びや達成感は、また次の「遊びの発展」につながっていきます。

また違う場面では、砂の上に水を溜めようとしている子どもたちがいるのですが、溜まらず染み込んでいく。周りを見ると、砂ではなく土の上には水が溜まる。それを「なぜだろう?」「どうしてかな?」と考え、次のアイデアを出し合い、工夫します。

そのような不思議に思う子どもたちの気持ちやひらめきは、「学びの芽ばえ」から「自覚的な学び」へとつながる大切な時間になります。

また、一人一人がさまざまなあり方を認め合い、その個性や能力を発揮できる多様性を尊重し合える社会は、幼児期からの経験が大切です。

困っている友だちがいれば、当たり前のように声をかける。おままごとも電車遊びも、子ども本人の意思で好きな遊びに没頭できる。それは、大人が関与や干渉するべきことではなく、ただただ遊びの機会を保障するべきです。何をするのか、誰とどうやって遊ぶのかは、子ども自身が考えます。そのような中で、「遊び」が子どもたちの道徳心さえも育てていくのだと思います。

昨今の海外の紛争下で命の保障が難しい子どもたちにも、虐待を受けて怯えながら生活をする子どもたちにも、困窮家庭で毎日のご飯を食べることが難しい子どもたちにも、その「遊び」の機会は存在するべきです。この世に生まれた子どもたちみんなに、平等に平和が保たれ、平和の中で「遊ぶ」環境を担保することが大人の役割であり、

責任だと思っています。

今も、これから先も、子どもたちに見えるものや触れるもの、子どもたちが感じるすべてのもの、そのすべてが子どもたちの未来をつくります。そのためには、私たちは子どもの「遊び」を守りまじょう。



いつもの保育の中で

7つのメッセージ」を 実践してみませんか!?

メッセージ・3

子ども自身に乗り越える力を育てましょう
……必要なのは、子どもの自発的な心の動き

子どもの成長に「乗り越える力」は欠かせません。自分より年長の子どもの遊びを見て、少し難しいことにチャレンジしようと思うことが成長につながります。安全面では、危険を排除するのではなく、個々に違う子どもの発達過程を踏まえ、その子に応じた課題を乗り越えられるよう援助することが大切です。

「乗り越える力を育てる」と聞くと、何か難しい課題を与えて、できなくても諦めずに最後まで頑張る姿を想像するかも知れません。苦しくても走り続けるマラソンをする姿や、受験勉強の鉢巻き姿を彷彿させる厳しい指導で、ビシバシ鍛える保育に陥ったりします。

「乗り越える」ために必要なのは「楽しい」であり、「好き」であり、「もっとやりたい」という自発的な心の動きです。

例えば、公園で大人とサッカーをする。その時、大人が楽しく走る。楽しくボールを蹴る。それを見て真似する子どもの中に

上手になる子がいる。下手な子がいる。困っている子「こうすれば、うまくいくよ」と教えてくれる。子ども同士の教え合いは視線が同じ得的を得ていて、下手な子も上手になっていく。友だちが好きだから、どんな真似で、楽しく上達する。

子ども同士の教え合いが中心で「楽しい」「もっとやりたい」「もっと上手になりたい」という感覚でいると、できないことがあっても、前向きに取り組むことができます。

また、困難が生まれた時に、いつ考えるかで結論が違ふことがあります。

睡眠が充分とれた朝は、よい考えが浮かんだり、「何とかなるさ」と樂觀的になったりしますよね。まずは「早寝、早起き、朝ごはん」で生活習慣を身につけ、元気な心と身体を育てましょう。

一人では埒が明かない時に、周りに信頼できる大人や、仲のよい友だちがいることも嬉しいことです。一人ではないという安心感から、落ち着いて考えたり、周りを広



く見ることが出来ます。

子どもの話を否定せず聞き、ありのままを受け止め、味方でいてくれる存在は、子どもの安心基地となり、挑戦する原動力となります。

いつもの保育の中で

7つのメッセージ」を 実践してみませんか!?

メッセージ・4

子どもの「自分でやりたい」を大切にしましょう
……一緒に考え、子どもの意欲を認めること

「何でも自分でやろうとする意欲のある子に育ってほしい」

そんな思いをもって子どもたちと関わる中で、目の前にいるその子がしようとすることを、じっくりと見守り続けることは難しいことだと思えます。しかしながら、その中で私たちが大切にすることは、その子がしたいこと、関心を向けていることは何なのかを見ようとし、理解しようとする心であると感じています。

ずりばいやハイハイを始めた乳児期の子どもには、しっかりと自分の意思があり、「あの玩具を手にしたい」「知らない世界を知りたい」という思いを感じ取ることができず。興味のある方向へ自ら進もうとしているという眼差しを向けることで、「何もできない赤ちゃん」ではなく、「意思をもった一人の人」としての関わりが変わってくると思います。

傍で見守りながらも、敢えて手を貸さずに見守ることは、意外と難しいことですが、自分で進むことでほしいものを手にすることができたという経験ができるように「程よい距

離」で温かく見守ることが、子ども自身の「やりたい」という意欲につながっていくと考えられています。

1歳児期を迎えると、自分の場所や自分のものがわかるようになり、毎日繰り返している生活の流れや物事の手順についてある程度予想もできるようになるため、何でも試して繰り返す中で物事に手応えを感じられるようになります。そのため、子ども自身が自ら出し入れたり、取り出したりしやすい環境をつくることで、「これで遊びたいな」と感じた時に、自分の意思で遊び込み、試行錯誤していく一歩を踏み出していきます。

どこまでできるのか、何に困りを感じているのかを理解することで、身の回りのことへの意欲も増していきます。例えば、自分で服に袖を通すことができるようになった時期は、袖を通して終えるまで傍で見守り、まだできないボタンかけをさりげなくかけてあげながら「自分でできた」ということを大いに認めることで、自分でできたという手応えを喜ぶようになり、さらなる「自分でやりたい」という気持ちを育んでいます。



子ども自身が自ら選択し「自分でやりたい」と取り組むことで、物事に見通しをもったり、責任をもったりできるようになっていくため、うまくいかない時は、一緒に考える、やろうとする意欲を認めることを繰り返す中で、さらなる課題への意欲が増していくのだと感じています。「やりたい」という自分の意欲が満たされる経験で「周りへの興味」へもつながっていくため、私たちは、自ら物事をしようとする子どもの心の動きやその過程をしっかりと見て、「頑張ってるね!」「自分でやったね!」といった言葉で「ちゃんと見ているよ」と伝えることを大切にし、子どもの「やりたい」という気持ちを育んでいきたいと思えます。

いつもの保育の中で

7つのメッセージ」を 実践してみませんか!?

メッセージ・5

子ども同士の関わりが大切です ……互いに育ち合う不思議な力

子ども同士の関係からは、時には見習い、時には助け合い、さらには配慮するなど、自らの意思により考えて工夫する機会が生まれます。

特にトラブルなどにおいても、気持ちをコントロールすることや、お互いを認め合うこと等を学び、多様性を認める力やコミュニケーション力を高めることにつながります。

乳幼児期の心の発達には、愛着の形成が大切です。

愛着の形成は、子どもの人間に対する基本的信頼感を育み、その後の心の発達、人間関係に大きく影響します。

大人との愛着形成ができると、次は子ども同士の信頼関係が形成されるようになり、関わりが深くなります。結果として子ども同士の対話が増加するようになります。また、対話がなくても一緒にの空間にすることで、「一緒にいることが楽しい」と感じるようになります。

例えば、ダンボールや空き箱を使って自

分たちの基地を作って遊んでいる時には、「どうやって作る?」「何がいるかな?」……など、たくさんのお話が飛び交います。もちろん、意見が合わず言い合いになることもあります。

しかし、それを解決するのも子どもたちの力です。「誰か、ここ持ってて!」「壊れても大丈夫だよ!」「できたり!」などと言いながら、子どもたちには子どもたち同士で認め合い、作り出す力があるのです。

幼児期は、特に子どもの発達に差がある時期です。大人からの話をすぐに理解できる子どももいれば、理解が難しい子どももいます。

万が一できなくても、隣にいる友だちの姿を見ながら真似をしてみること、理解していく。「わからない」なんて言わなくても、友だちと一緒にやって行動し考えてくれる。子ども同士の関わりは、大人との関わりよりも意義が大きいと感じます。

そして、子どもたちは、言語が異なり言葉が通じない国の子どもたちとも、手をつないだり遊んだり、同じタイミングで笑っ



たり、大人ではできないコミュニケーションの力ももっています。子どもたちには、互いに育ち合う不思議な力があるのです。

子どもたちがこれからコミュニケーション力を高め、多様性を認めるといった成長をするために、お互いを尊重しながら生きていくために、子ども同士の関わりが大切です。

いつもの保育の中で

7つのメッセージ」を 実践してみませんか!?

メッセージ・6

みんなで食べると美味しいんです

……子どものうちに「豊かな食事」経験を

食事は生きるために欠かせない行動であり、その大切さは私たちの日々の生活にも深く浸透してきました。ですが、ただ「食べる」という行為だけでは美味しい食事は成立しません。

好き嫌いなく健康的に食べることや、食を通して「心」を満たすためには、人やものとの関わりが重要なからです。

「孤食問題」——これは、乳児期から子どもに影響を及ぼします。

家庭で、家族が食べる前あるいは食べ終わった後に、じつくりとその子だけの時間で食事を摂っていた子どもは、保育園・こども園でも、友だちがいなくなつてから漸く^{ようや}ごはんに手をつけます。人と一緒に食べる機会に乏しい^{とほ}子どもは、自分の主観でしか食べ物の味や食感を知ることができず、「美味しい」を共感したり、初めての味を受け入れることが難しく、必然的に好き嫌いも多くなります。やがて保育園・こども園で人と食べることが慣れてくると、だんだんと好き嫌いも減り、さまざまなものを食べられるようになります。

た。言葉が話せない赤ちゃんでも、食事の場を共有することは大きな意味をもちます。

食事は、与えられるものでも強制されるものでもなく、子ども自身が楽しんで食べることが大切ですが、それは「食べ方」においても同様です。食べる時間も、食べる人も、食べる量も大人がすべて決めてしまつては、それは「与えられた食事」であり、意欲や楽しさといった気持ちは膨らみません。

食べるタイミングや、食べられる量は、初めはわからず失敗することもあると思います。が、大事なのは正解を見つけることではなく、自分で考えられるようになることです。大人が「教えよう」ではなく、子どもから投げかけてくれる、考えてくれるようにすることが大切です。

これらはどれも「ひとり」では気づけない、得られないことばかりです。

今、さまざまな「こ食」が問題視されている世の中で、数年間、新型コロナウイルス感染症に^{ほんろう}翻弄されたこともあり、さらに改善への道のりが険しくなっています。教育施設でも、向かい合わずに着席する、黙食するなど、



本来あるべき姿とはかけ離れた生活を子どもたちは強いられていました。このような時代だからこそ、今一度食事がもたらす影響を考え、今ある食事環境が子どもたちにとって最適であるかを見直す必要があります。

子どものうちに経験した「豊かな食事」は、子どもの舌に、体に、心に^{しみ}滲み込んでいきます。食事は一方的に与えられるものではなく、ものに触れ、人と心を通わせ、刺激し合うことでより健康的なものへと成長していくのです。

いつもの保育の中で

7つのメッセージ」を 実践してみませんか!?

メッセージ⑦

子どもは自然が大好きです

……「よく食べて動いて寝る子」に

子どもが自然に触れることは多くの意味をもちます。

子どもは、虫や花など小さなものから大きな地形や星などにも不思議を感じて、興味をもちます。さらに自然の中で活動することは、体力を培い、運動能力や危険を予知する力になります。また四季を通じた気候の変化や、さまざまな生物と触れ合うことで五感を研ぎ澄まします。子どもは自然が大好きです。

赤ちゃんが泣いている時、「抱いて心音を聞かせる」「立って抱いてゆらゆらする」「外気に触れる」、これは保育の基本動作です。

ヒトも自然の一部であり、赤ちゃんは大人に抱っこしてもらうことで、自然に包まれる快感を得ます。他の動物と違い、生理的早産で生まれ、1歳になるまで歩けない赤ちゃんの移動の欲求も満たしています。

近年は、暑すぎたり、寒すぎたりすることもあります。時間や衣服を調節して、1日1回は外気に触れましょう。雨の日も小雨なら、カバーを付けて出かけましょう。

赤ちゃんは、カバーが曇ったり、カバーに雨粒が滴る様子も見逃しません。自分で歩けない分、大人に負けない観察力があります。

歩けるようになると、歩くことが遊びになります。適度な斜面を見つけてヨイショ、ヨイショと上ったり、トトト……と走って降りたり、ちよつとだけ上を目指す子どもたち。

自分の实力を知り、できないことは手助けを求めることも、自然から教えてもらう大事なことです。

歩いたり走ったりが上手になると、3次元の世界へ。固定遊具や築山など、高いところを目指します。雲を見たり、ヘリコプターに手を振ったり、そして遠くも見渡せるようになります。室内より自由で、たくさん遊びや素材や仲間が待っていて、しかも遊び放題のパラダイスです。

「お外行くよ」「よっしゃ」。子どもたちは今日も、自然の中で身体を動かす楽しさを感じます。

保育施設では、その立地によって、自然

を保育に取り入れています。川があれば川、海があれば海、山があれば山、というふうにして。その手助けをする環境管理士という資格を取得する保育者もいます。

室内も自然がいっぱい。お日様が差し込み、風が通り、昆虫がゴソゴソしたり、りんりんとうめいたりします。散歩で摘んできた草花を飾ったり、図鑑で名前を調べたり、ドングリで制作を楽しんだり……。インドア派の子どもも大満足の環境づくりを心がけています。

太陽の光や外気は体内時計を整え、生活のリズムをつくります。自然は「よく食べて動いて寝る子」を育てます。



「幼児期までのこどもの育ちに係る基本的なビジョン」と「7つのメッセージ」

の関係

玉川大学教授
大豆生田啓友

「幼児期までのこどもの育ちに係るビジョン（はじめの100か月の育ちビジョン）」（以下、「100か月ビジョン」）は、幼児期まで（妊娠から小学校入学時までのおおむね100か月）こそが、生涯にわたるウェルビーイング（幸せな状態にあること）の向上にとって最重要であるため、社会全体での共有が必要であると、こども家庭庁がその羅針盤を示したものです。そこには、「①こどもの権利と尊厳を守る、②『安心と挑戦の循環』を通してこどものウェルビーイングを高める、③『こどもの誕生前』から切れ目なく育ちを支える、④保護者・養育者のウェルビーイングと成長の支援・応援をする、⑤こどもの育ちを支える環境や社会の厚みを増す」という「羅針盤としての5つのビジョン」が示されています。

この「100か月ビジョン」と「7つのメッセージ」の共通性を考えてみましょう。

「7つのメッセージ」の第一は、「子どもの思いを受け止めましょう」です。

子どもの思いや願い（その声）を尊重するという意味ですから、「こども基本法」に裏付けて作成されたビジョン①の「こどもの権利と尊



厳」と共通します。また、不安な時に身近な大人に寄り添うことや安心感をもたらす経験の繰り返しにより安心感の土台を形成する「アタッチメント（愛着）」をも包含しますので、ビジョン②の「安心と挑戦の循環」とも共通するでしょう。

「7つのメッセージ」の第二は、「子どもの『遊び』を守りましょう」です。

遊びの重要性については、ビジョン②の「安心と挑戦の循環」において、「遊びと体験が不可欠」であることを示しています。「100か月ビジョン」では、遊びはそれ自体が目的であると同時に、安心から挑戦へとつながるウェルビーイングを高めるとしています。そして、特に「環境」との関わりの重要性についても示しています。

第三は、「子ども自身に乗り越える力を育てましょう」です。

「100か月ビジョン」では、前述したビジョン②の「安心と挑戦の循環」の内容とのつながりが大きいと思われます。子どもが困難を乗り越えるためには、「安心」という基盤があつて、そこから「挑戦」へとつながると考えられるからです。それは「循環」という言葉でも示され

幼児期までのこどもの育ちに係る基本的なビジョン (はじめの100か月の育ちビジョン) 概要

令和5年12月22日 閣議決定

はじめの100か月の育ちビジョンを策定し全ての人と共有する意義

幼児期までこそ、生涯にわたるウェルビーイング(身体的・精神的・社会的に
幸せな状態)の向上にとって最重要

✓誰一人取り残さないひとしい育ちの保障に向けては課題あり

※児童虐待による死と重傷の約半数が0～2歳/就園していないこどもは、家庭環境により、他のこどもや大人、社会や自然等に触れる機会が乏せられる

✓誕生・就園・就学の前後や、家庭・国・関係機関・地域等の環境間に切れ目が多い

⇒社会全体の認識共有×関連施策の強力な推進のための羅針盤が必要

目的 全てのこどもの誕生前から幼児期までの
「はじめの100か月」から生涯にわたるウェルビーイングの向上

こども基本法の理念ののっとり整理した5つのビジョン

1 こどもの権利と尊厳を守る

⇒こども基本法ののっとり育ちの質を保障

- ✓乳幼児は生まれながらにして権利の主体
- ✓生命や生活を保障すること
- ✓乳幼児の思いや願いの尊重

2 「安心と挑戦の循環」を通してこどものウェルビーイングを高める

⇒乳幼児の育ちには「アタッチメント(愛着)」の形成と豊かな「遊びと体験」が不可欠



「アタッチメント(愛着)」＜安心＞
不安な時などに身近なおとなが寄り添うことや、
安心感をもたらす経験の繰り返しにより、安心の
土台を獲得

豊かな「遊びと体験」＜挑戦＞
多様なこどもやおとな、モノ・自然・絵本・場所など身近
なものとの出会い・関わりにより、興味・関心に合わせた
「遊びと体験」を保障することで、挑戦を応援

3 「こどもの誕生前」から 切れ目なく育ちを支える

- ⇒育ちに必要環境を切れ目なく構築し、
次代を支える循環を創出
- ✓誕生の準備期から支える
 - ✓幼児期と学童期以降の接続
 - ✓学童期から乳幼児と関わる機会

4 保護者・養育者のウェルビーイング と成長の支援・応援をする

- ⇒こどもに最も近い存在をきめ細かに支援
- ✓支援・応援を受けることを当たり前に
 - ✓全ての保護者・養育者とつながること
 - ✓性別にかかわらず保護者・養育者が
共育ち

5 こどもの育ちを支える環境や社会の厚みを増す

- ⇒社会の情勢変化を踏まえ、こどもの
育ちを支える工夫が必要
- ✓「こどもまんなかチャート」の視点
(様々な立場の人がこどもの育ちを応援)
 - ✓こどもも含め環境や社会をつくる
 - ✓地域における専門職連携やコーディネーター
の役割も重要

【「はじめの100か月」とは】

本ビジョンを全ての人と共有するためのキーワードとして、母親の
妊娠期から幼保小接続の重要な時期(いわゆる5歳児～小1)まで
がおおむね94～106か月であり、これらの重要な時期に着目

はじめの100か月の育ちビジョンに基づく施策の推進

- ✓ こども大綱の下に策定する「こどもまんなか実行計画」の施策へ反映
- ✓ 全ての人の具体的な行動を促進するための取組を含め、こども家庭庁が
司令塔となり、具体策を一体的・総合的に推進

ているように、発達の段階を
乗り越えて力を獲得するとい
うよりも、周囲の環境との関
係性の中で、「行きつ戻りつ」
しながら育っていくというイ
メージとも言えます。

第四は、「子どもの『自分で
やりたい』を大切にしましょ
う」です。

第六は、「みんなで食べると美味しいんです」
です。

第七は、「子どもは自然が大好きです」です。

ビジョン②の「安心と挑戦
の循環」、あるいはビジョン①
の「こどもの権利と尊厳」と
関連すると考えられます。ビ
ジョン①の観点で言えば、子
どもは権利の主体者です。大
人は、子どもに対して「あな
たはどうしたい？」と、その
子の願いが尊重されることが
求められます。

ここまで「7つのメッセージ」で、ビジョン
④「保護者・養育者のウェルビーイングと成長
の支援・応援をする」と、ビジョン⑤「こども
の育ちを支える環境や社会の厚みを増す」は出
てきませんでしたが、保護者とのつながり、地
域とのつながりは、「7つのメッセージ」のす
べての土台に含まれているものであると考えら
れます。

第五は、「子ども同士の関わ
りが大切です」です。

これもビジョン②との関連
性が高いですが、ビジョン③
の「『こどもの誕生前』から切
れ目なく育ちを支える」との
関係もあると思われます。そ
れは必ずしも子ども同士の関
わりだけではありませんが、
3歳未満児などで園などに

私たち全私保連は 「こどもまんなか応援サポーター」宣言 をしました

2024年6月、私たち全私保連は「こどもまんなか応援サポーター」宣言をしました。引き続き、保育運動「新しい時代は子どもから」を展開し、「こどもまんなか社会」の実現に取り組んでいきます。

「こどもまんなか応援サポーター」って？

「こどもまんなか応援サポーター」について、こども家庭庁のHPには、「すべてのこどもや若者たちが幸せに暮らせるように、常にこどもや若者の今とこれからにとって最もよいことは何かを考え、社会全体で支えていく」という「こどもまんなか」の趣旨に賛同し、自分たちが考える「こどもまんなか」アクションを自ら実行すること、そして発信に取り組んでいただける個人、団体・企業、自治体などを、「こどもまんなか応援サポーター」と呼ぶとされています。

私たち全私保連は、長年さまざまな保育運動を展開し、「子どもを中心とした社会」をつくっていかよう取り組んできました。これらの運動は、「こどもまんなか」の趣旨にほかなりません。現在展開している保育運動「新しい時代は子どもから～子どもの今が未来を創る～」を推進することで「こどもまんなか社会」の実現を願い、応援サポーターの宣言をしました。

私たちの「こどもまんなか」アクション

保育運動「新しい時代は子どもから」では、子どもにとって大切なことを7つのメッセージに託しています。

- 1 子どもの思いを受け止めましょう
- 2 子どもの「遊び」を守りましょう
- 3 子ども自身に乗り越える力を育てましょう
- 4 子どもの「自分でやりたい」を大切にしましょう
- 5 子ども同士の関わりが大切です
- 6 みんなで食べると美味しいんです
- 7 子どもは自然が大好きです

この7つのメッセージは、私たちが保育をしていく中で培ってきた「子どもにとって大切なこと」です。私たち大人には、子どもたちのためによりよい社会をつくっていく責任があります。そのためには、「子どもにとって何が必要なのか」を保育関係者だけではなく、多くの人に知っていただき、実践してもらうことです。そうすることで、すべての大人が子どもを支える「こどもまんなか社会」が実現するのではないのでしょうか。この7つのメッセージを広く伝えていくこと、これこそが私たちにとっての「こどもまんなか」アクションだと考えています。

あなたも「こどもまんなか応援サポーター」に！

こども家庭庁のHPには、

「『こどもまんなか』応援サポーターに参加するため、申請や届出などの手続きは必要ありません。こどもまんなかの趣旨に賛同し、今日からできる身近な『こどもまんなか』なアクションをSNSで『#こどもまんなかやってみた』をつけて発信いただくだけで、こどもまんなか応援サポーターとなります。」

とあります。ぜひ皆さんも、7つのメッセージを広める活動をお願いします。そしてSNSで発信していきましょう。私たちのそれぞれの小さな活動が「こどもまんなか社会」をつくっていきます。

★発信の際は、

#こどもまんなかやってみた

#新しい時代は子どもから

を付けて発信をお願いいたします！

こども
まんなか

あとがき

この冊子を手にとられたみなさま、まずは日頃の「保育」を念頭に読んで心が動いたなら、誰かとその感動をシェアしてみてください。そして、保護者さんや近隣地域の方にも「子どもってこんなに面白くて、大切なんだよね」と話しかけてみてください。その語らい、共感や気づきが「こどもまんなか社会」につながり、「新しい時代」を拓くことになると信じます。「子どもの今が未来を創る」。その「今」をだいにするのは「あなた」であり、「私たち」です。ともに考え、語り合ってみませんか。ご意見やご感想、取り組み事例なども待ちしています。

全私保連保育運動推進会議

議長 石田 雅一（東京都・社会福祉法人呉竹会）

副議長 伊藤 唯道（広島市・順正寺こども園）

議員 大友 潤一（秋田県・やまばと保育園）

議員 神田 寿恵（大分県・すみれこども園）

議員 川本まり子（兵庫県・明光保育園）

議員 藤城 智哉（愛知県・希望が丘こども園）

写真協力：全私保連保育運動推進会議／小俣幼児生活団（栃木県足利市）

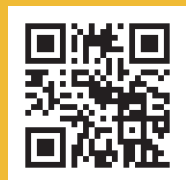
イラスト：渡辺リリコ（「保育通信」2013・2014・2015年、目次イラストより）

*本冊子は、「保育通信」2022年10月号～2023年1月号、2023年4月号～10月号、2023年12月号～2024年6月号、2024年11月号に掲載した連載・記事を再構成しました。

また、PDF版も作成しましたので、下記のアドレスより伝えたいページなどを抜き出して印刷することも、データを誰かに送ることも可能です。

全私保連保育運動推進会議 HP

<https://undou.zenshihoren.or.jp/>



全私保連保育運動 新しい時代は子どもから～子どもの今が未来を創る～ 私たちが伝えたい 7つのメッセージ集

2025年3月31日発行

編者 公益社団法人 全国私立保育連盟
保育運動推進会議

発行所 公益社団法人 全国私立保育連盟
〒111-0051
東京都台東区蔵前4-11-10 全国保育会館
TEL 03-3865-3880 FAX 03-3865-3879
URL : <https://www.zenshihoren.or.jp/>
E-mail : ans@zenshihoren.or.jp

デザイン 有限会社タモン
印刷・製本 株式会社光陽メディア

© Koekisyadanhojin Zenkokushiritsuhoikurenmei 2025 Printed in Japan
落丁・乱丁本は本会事務局へご連絡ください。
送料本会負担にてお取り替えいたします。

